

# トランスジェンダーとクロスドレッサーの 性の商業化と現状について

Commercializing Transgender People and Crossdressers in Japan:  
Its New Trend and Suppliers

日本学術振興会  
石井由香理\*

## 1 はじめに

日本の性別越境の歴史は、商業世界との結びつきが強い。舞台に成人女性をあげることなく、「女形」として女性役も男性が演じる歌舞伎は、日本の伝統芸能として位置づけられている。また、宝塚歌劇団は、「男役」を含むすべての役を女性が演じ、たくさんのファンを獲得している。より大衆的な領域についていえば、江戸時代に女装し接客やセックスワークを行った陰間<sup>1)</sup> (Pflugfelder 1999; McLelland 2005; 三橋 2008)、第二次世界大戦後に街頭で客を取った女装男娼や1950年代半ばより登場したゲイボーイ<sup>2)</sup>、1960年代からの(和製)ブルーボーイ(三橋2005)、1980年代からのミスターレディ、ニューハーフ(三橋2002, 2006a, 2008; McLelland 2005)や、1960年代初頭より登場した女装クラブ<sup>3)</sup>

- 
- 1) 陰間について三橋は、「陰間茶屋や出張先の座敷で、客の酒席に侍り、芸能を披露し、セックスワークを行うことを業とする女装の男性(その多くは少年)」であると記している(三橋2008: 99)。
  - 2) ゲイボーイについては、基本的には男装をした男性が多く、「異性装を(必ずしも)伴わない男色文化」(三橋2006: 4)であった。
  - 3) バーを自称する店もあるが、トランスジェンダーやクロスドレッサーの人たちが接客を行う店については本稿ではクラブに統一する。

---

\* ISHII, Yukari 日本学術振興会 yukari.ishii@unisa.edu.au

(三橋 2002, 2006b, 2008) で接客を行った女装者などがこうした事例として挙げられる。

西洋文化においては、生誕時に割り振られたジェンダー (assigned gender) を引き受けないことは考えられず、異性装にしても原則としてタブーであった。例えば、近代初期のロンドンにおいて、女性の男装は、売春や不法な性行為と結びつけられるものであり、女装については、祝祭儀礼などの場合は寛容に受け取られたが、日常的に行うことは禁忌であり、ひそかに行くことすらも考えられないことであった (Shaporo 1994: 30)。女装で捕まった記録があっても、それは常習ではなく一時的な行為としてであり、それもセクシュアルな軽犯罪や不道徳ではなく、若さゆえの愚行など見なされた (Shaporo 1994: 29)。近代化や都市化は、こうしたジェンダー規範の自明性を失わせるものであった。大量の人口流入で異文化の人々の存在や価値観が無視できないものになり、ゲイ・コミュニティが形成されたために、欧米社会において自明化されていたジェンダー規範は揺らぎ、それへの抵抗として、規範は明示化され再強化されることになった (Stryker 2008)。

国内においても、特に欧米ジェンダー規範文化の影響を受けた明治以降、生誕時に割り振られたジェンダーを引き受けずに生きるということは、非常に難しかった (e.g., Pandey 2009)。職場、家族、地域の一員としてジェンダー役割を引き受けなければならないという抑圧は強く、それでも望みの性で生きたいと願うのならば、これらとは別の関係性の受け皿である商業世界と関係をもつことになる。しかしながら、トランスジェンダーやクロスドレッサーであることを商品化し、そのことによって生活できるほどの給与を得ることは、限られた人たちにのみ可能なことであっただろう。特に、性別を越境した後の性で生活し続けることができるとすれば、そのためには、卓越した容姿の端麗さ、ダンスなどの身体技術、動作の美しさ、客を惹きつける接客能力などが必要となる。あるいは、先に示したように、セックスワーカーとして街頭に立つなどして生活する人たちもいたが、そこには多くのリスクが伴う。多くの人たちにとっては、こうした世界と接点を持たずに、割り振られた性を生きるか、あるいは、トランス女性であれば、1960年代後半より形成されていった秘密厳守のアマチュア女装クラブ (三橋2008: 9) などへ行き、一時的に性別越境をするなどが現実

的な選択肢であったことだろう。割り振られた女性性に違和感を覚える人たちについてはより資料がない。男性から女性への性別越境と比較し、女性から男性への移行は、おそらく、日本社会において性別規範へ脅威と見なされず、それほど大きなスティグマを負わない代わりに、軽視されてきたと考えられる。女性同性愛の男役や、商業の世界での「オナベ」等の属性への同一化をしていたが(杉浦2006)、しかし、その商業規模はトランス女性や女性装をする人たちと比較して相当程度小さかったことだろう。

1990年代半ばからの「性同一性障害」概念の登場は、性別に違和感を覚える人々と商業世界のこうした状況を大きく変化させたと考えられる。まず指摘されるのが、医療概念を経ることにより、人々は、必ずしも商業世界を経由しなくても、自身の割り振られたアイデンティティを生きる必要がなくなった点である。もちろん、それは性別移行の医療化と既存のジェンダー規範の再生産という新しい問題を生じさせ、また、実際には差別・偏見が残っていることは指摘されよう(e.g., 三橋2010)。しかしながら、少なくとも、より多くの人たちが参与できる新たな性別移行の経路が作られたことに関しては評価される。さらに、一般社会において、性別移行は医療概念との関係で新たに認識されるようになった。もともと、性別越境を望む人たちが「変態性」と結びつけられた原因のひとつは医学言説である<sup>4)</sup>。そうした変態的なイメージと物珍しさに付加価値を付けて商品化したのが商業世界であるとすれば、医療は、性自認の性と身体的な性の不一致状態を「障害」と定義しなおし、新たなシステムを作り上げた。国内において医学的権威が正当化したことのインパクトは相当なものであり、それは、行政、司法、教育などを動かした。戸籍上の性別が変更できる法律の制定や、教育機関へ性別違和を覚える生徒への配慮を促す文科省の通達などは、医学的な権威と無関係には起こり得なかった。同時に、「障害」であることと引き換えに、性別越境は社会的な承認を獲得することになる。当然、すべての当事者が「性同一性障害」によって救われたわけではない。だが、フルタイムの性別移行という点で見れば、商業世界の経路と比較し、圧倒的にそれを達成できる人の数を医療システムは増やした。また、一般社会の受け入れについては十分に進んでいないとしても、性別移行が医学的には正当化されたもの

4) 例えば、(Krafft - Ebing 1894=1956: 194, 203-205)を参照のこと。

という情報の共有は、さらに新たな当事者たちを生むことになったと考えられる。

医療化によって起こったこうした社会状況の変化は、しかしながら、性別越境と商業世界との結びつきを失わせるものでもなかった。今日、トランスジェンダーやクロスドレッサーの人々の性は商品化され続けている。では、そうした社会状況の変化は、商業世界で働く人々が置かれている状況や「客」のまなざしにどのような影響を与えているのか。こうした当事者たちが直面する現代的な生きづらさや新たな社会問題とは何であるのか。これまで、トランスジェンダーと商業世界についての国内の調査については限られており、特に、現状についての学術的な調査はなされていない。そもそも、異性愛やシスジェンダーの人々についての歓楽街やセックスワークの調査に関してさえ、学術業界においてタブー視され、拳がっているデータもほんの一握りの状況である。しかしながら、商業世界の調査は、保健福祉の観点からも早急に取り組まれるべき課題である。諸外国の調査では、トランスジェンダーのセックスワーカーの社会的排除の問題 (Bianchi et al., 2014) や、HIV/AIDsを含む性感染症の感染率の高さが指摘されている (Poteat 2015)。これらについても国内状況は不問に付されているのが現状である。

筆者は、「独自化する自己像——性別に違和感を覚える人々の生活世界から」(特別研究員奨励費14J11903)の研究の一環として、2016年度より都内の女装者、セックスワーカーなどのキーパーソンへの聞き取り調査、人脈の作りを行ってきた。キーパーソンへの調査は予備調査の位置づけであり、かつ、今後は対象を拡大し、トランスジェンダーもしくは、クロスドレッサーとして現在商業世界とのかかわりを持つ人々への調査を行っていくが、本稿ではひとまず当該調査によって得られた知見について報告する。すなわち、クロスドレッサー、セックスワーカー、フィリピン系トランスジェンダーについての知識を有する3人のキーパーソンへの聞き取りを中心に、トランスジェンダーやクロスドレッサーの人々と商業世界の関係性について現時点で明らかになった事柄について報告するものである。

## 2 調査について

キーパーソンである調査対象者については、研究を行っていたり、ライター  
の職に就いているため、本人の了解を得た上で、本名或いは通称名を記述する  
ことにした。対象者の三橋順子さんは1955年生まれで、80年代より女装を始め、  
アマチュア女装の店や商業女装クラブで活動した。また、そうした経歴を生か  
し、彼女自身が歴史研究者として主にクロスドレッサーについての論文や本を  
執筆したり、複数の大学で講義を行っている。畑野とまとさんは、いわゆる  
「ニューハーフヘルス嬢」として、セックスワークに従事した経歴をもつ。また、  
経営者兼ワーカーとしてパートナーと二人でトランスジェンダーの非店舗型の  
いわゆるデリバリーヘルスを経営したり、アダルトビデオへ出演したことがあ  
り、現在はライターとして活躍している。玉川大学ELFセンターの助教の岡田  
トリシャさんは、早稲田大学における博士課程研究として、フィリピン人ト  
ランスジェンダーのエンターテインメント・ビジネスについての聞き取りや参与  
観察調査を行っており、特にショーパブについて研究している。聞き取りは  
2016年に都内で行われ、すべて調査者石井と1対1で行われた。聞き取りの内容  
としては、トランスジェンダーやクロスドレッサーの人たちがどのように商業  
世界と関わっているのか、その現状についての質問が主であるが、三橋さんと  
畑野さんについては自身の経験についても聞き取りを行っている。聞き取りの  
回数は全員1回であり、インタビュー時間はおよそ40分から3時間程度であ  
る。インタビュー音声を文字化したものをデータとして用いた<sup>5)</sup>。

## 3 国内トランスジェンダー・クロスドレッサーを取り巻く商業世界

### 3.1 「性同一性障害」の影響

医療化した性別越境概念は、商業世界にどのような影響を及ぼしたのだらう  
か。最初に指摘されることは、このふたつの世界は互いを遠ざけることで、各々

5) 本調査は、調査内容や方法、意義、倫理的配慮などについて、大阪府立大学人間社会シ  
ステム科学研究科研究倫理委員会に事前報告を行い、同委員会の承認後に実施されたもので  
ある。

の領域を維持／成立させたということである。その理由は商業世界と「性同一性障害」に同一化した側の双方に認められる。まず、トランスジェンダー現象を医療化する際、すなわち90年代に「性同一性障害」概念が国内に登場した時に、この概念の正当性を主張する運動に関わった人たちは、正当性を確保できなさそうなものとの差異化を図った。その一つが商業世界であり、性別越境行為によって金銭を授受していた者、「ニューハーフ」や女装者、セックスワーカーとの距離が置かれた<sup>6)</sup>。身体を異性のものに変える治療や手術は、人々の「本来的なジェンダー・アイデンティティ」の同一化の真剣な思いのためであって、性的行為や金銭を得ることと結びついてはならなかったようだ<sup>7)</sup>。

三橋:ニューハーフ世界とか女装世界とかとコンタクトがあったら、そこにいたっていうだけで、性同一性障害者としては育ちが悪いと。下手したら、(性同一性障害として認められない)除外診断だというふうに思ってた人は、ずいぶんいた。

また、商業世界の側にとっても、医療化された性別越境概念は厄介なものであった。医療化された概念のもとでは、当事者たちは「障害者」であり、治療対象であったり、あるいは、医療化された像をもとにして権利を求める人々であった。それは、商業世界において性別越境行為を、物珍しさやセクシュアルな文脈から読み解くことと反している。そのため、「性同一性障害」という言葉は、商業世界においてはことごとく避けられるようだ。三橋さんは自身が手伝いしていた女装クラブにおいて次のような経験をしたことを語ってくれた。

三橋:性同一性障害の概念が普及し始めた頃、あるお客さんが、何かテレビでも見たのかな、「おまえらって病気だったんだ」って言い出して、「じゃ、俺は病気の間を相手に、その病気をネタに酒飲んでたのか」って。「だったら、ものすごい俺は人でなしじゃないか」って言い出して、酔った揚げ句だけど、もうなだめるのに大変だったんです。

6) 「性同一性障害」からの差別化については(三橋 2010) 参照。

7) こうした商業世界との差別化については、当事者言説のなかにも表れている(石井 2013)。

また、商業世界において「性同一性障害」を介したやり取りは避けられていると、同様の見方を畑野さんもしている。

畑野：どう考えても話暗くなっちゃうっていう。

トランスジェンダーやクロスドレッサーの人たちが接客を行う店では、そうした背景から、1980年代に登場した「ニューハーフ」という用語が商業世界において未だに使われ続けているようである。また、「トランスジェンダー」という用語についても、昨今LGBTという概念が一般に知られ始めてはいるものの、Tが何の頭文字かまでを知る人は国内において限られており、一般の認知度は低い上に、この用語はやはり人権意識と結びついている。これは「クロスドレッサー」も同様である。そうしたなかで、クラブ、ショーパブ、セックスワークに関わるプロの「女性」は、「ニューハーフ」と呼ばれ続け、自称し続けることになる<sup>8)</sup>。ちなみに、「ニューハーフ」という用語は日本独自のものであり、国際的に使用されてはおらず、また、商業世界に関わらない当事者たちが自称するものでもない。そのために、「ニューハーフ」という自称が使われたとき、かれらは商業的な文脈で自らの存在が読み込まれることを許可していることが示されており、このコンテキストにおける従業員と客のやり取りにおいては「性同一性障害」概念やその後の社会的な変化は、ほとんどなかったことになっているようだ。そのため、人権問題として扱われようとしている動きとは対照的に、たとえば、店名になったり自称する際に「オカマ」という用語が使われるときには特にそうであるが、接客時には性別越境を嘲笑するコードが呼び起され、接客する人たちの見た目や言動のなかで「女になり切れなさ」などが強調される。客はそれに反応するが、こうしたやりとりには、90年代以前からの予定調和な文脈がそのまま残されていると言える。ただし、実際には、商業世界と関わらない当事者はいても、医療領域の情報、たとえば「性同一性障害」とは何かをまったく知らないとか、関わらない当事者がいるとは考えにくい。当事者はふたつの領域を戦略的に行き来しているのが実情であろう。

8) 三橋は、飲食接待、ショービジネス、セックスワークを「ニューハーフ三業種」と呼んでいる(2008: 99)。

### 3.2 店の格と場の特徴

従業員の給料やスキル、客単価の高さという観点からヒエラルキーを作るとすれば、ニューハーフ系のショーパブ、ホステスクラブの高級店がその最上位に置かれることだろう。これはシスジェンダー<sup>9)</sup>の女性が働く店でも同様であるが、高級店であるほど、従業員たちの容姿が問われ、接客やダンスのスキルを身につけなければならない。トランスジェンダーの店についていえば、見た目や言動の「女性らしさ」を磨いていくことが重要であり、また、接客やダンスの技能を高める必要がある。高級店は、従業員を育てるためにしばしば時間とカネの投資を行う。店で接客をする前に、1年間黒服やボーイをする人たちもいたという。

三橋：プロのお店は、本当に若い子を、それこそ高校中退みたいなような子を、そこから仕込んでいくっていうケースが多かったです。

I：もう何年もかけてですか。

三橋：何年もかけてね。最初の1年間は(男装の)ボーイから始めるみたいな。

また、高級店になるほど、場は切り分けられ、役割が厳密化していくと三橋さんは話してくれた。場ははっきりと、表舞台と裏舞台に分かれ、彼女たちの行うべき仕事の範囲は容姿と会話で客を魅了し楽しませることであり、それ以外の給仕は、黒服など裏方の仕事となる。そして、こうした店では、カネを落とす「男性」のまなざしが非常に重要である。最も、こうした高級店、特にショーをするためのスキルを必要とするショーパブは、コストがかかるために、景気の後退とともに維持が難しくなったという。店舗の維持、設備投資、従業員への給料、人材の教育を行う必要があるために、高い維持費がかかるためである。

また、こうした店に勤めた従業員たちが、退職後にどこへ行くのかはほとんど把握されていない。国内のエンターテイメント・ビジネス業界において、たとえば、自分が踊れなくなったとしても、これまで培ったダンスのスキルを教

9) 本人のジェンダー・アイデンティティと生誕時に割り振られたジェンダーが一致している者。

えるなどの仕事があればよいが、そうした受け皿はほぼないと考えられる。景気変動の影響を大きく受ける元々不安定な業界であるが、年齢を重ねたり、心身の状態が万全でなくなったときには、今までの経歴を生かした仕事を見つけることは難しく、また、トランスジェンダーであるという社会的にはスティグマになり得る属性で、一般社会に放り出されることになる。

三橋：中には、本当にダンスが好きで、踊るのが好きで、そういう人は（ニューハーフ向けの）ダンス教室の先生になればいいのだけど、フィリピンにはあっても日本ではほとんどない。だから、年取ったり体を無理して痛めたりして踊れなくなったら、もうどうしようもないわけ。

### 3.3 フィリピン人エンターティナー

国内トランスジェンダーのエンターテイメントを支える一役を担ったのが、フィリピン人トランス女性たちである。フィリピン人のみの店が主のようだが、大手のショーパブで働いていることもある。日本のフィリピン人系ショーパブで就業を希望する者たちは、まず、フィリピン本国での選抜を受ける必要があり、その年齢層は10代後半から20代が主である（岡田 2014）。まず本国でエージェンシーを探し、トレーニングを受けて、オーディションに合格した人たちが送り込まれるシステムになっている（岡田 2014）。フィリピン人トランス女性のエンターティナーについては、1970年代末より入国が始まり、80年代より顕著に数が増えたという（岡田 2014）。しかし、岡田さんによれば、ビザの影響によりこの動向は変化するだろうということだった。2005年に法務省が興行ビザの要件を厳格化したことにより、ピーク時の2004年に64,742人にいた興行資格で滞在していた外国人の数は一気に減少し、2012年に1,646人で底を打ち、2014年から2000人前後で推移し、2016年現在2,077人である（法務省2014, 2016）。こうしたビザ規制の影響は、日本に滞在するフィリピン人トランス女性の動向に相当程度影響を与えたと思われるが、具体的にどう数が増え、また、それが歓楽街の様相にどのような影響を与えているかを把握するためには今後さらなる調査がなされる必要がある。また、さらに問題なのは、性同一性障害の影響を受け、日本人トランス女性たちにとって、仮にこうした店で働く理由

が失われて人が減ったとして、それを支えていたのがフィリピン人ワーカーだったとすれば、それがトランスジェンダー・クロスドレッサー系の店の隆盛をどう変化させたかも興味深い点である。

### 3.4 異性装の店

上述のいわゆる「ニューハーフ」の人たちが働く高級店と比較すると、一般に女装系の店は、よりアマチュア度の高いものであると認識されているようだ<sup>10)</sup>。それは、料金システムにも反映されている。これらの店の場合、スジェンダーの男性客だけでなく、サービスを提供する側である女装者たちにも発生する。すなわち、往々にして金を払って接客をするのである。もっとも、料金体系は差異化されていて、三橋さんが90年代に関わった店の場合、男性客は最初の1時間が5,000円、その後1時間ごとに2,000円が加算されたそうだ。他方女装者と女性は4,000円で時間無制限で、男女ともにフリードリンク・フリーカラオケ制だったという。女装者は店の会員になることもでき、その場合は月額15,000円だったそうで、月に4度店を訪れば元が取れるシステムになっていた<sup>11)</sup>。

客は女装者を目当てに店に集まるが、この場合、女装者の人たちもまた、場に対価を支払う点で、自分を女性としてまなごし扱う、あるいは、女装者として特別な価値を見出す、往々にしてスジェンダーでヘテロセクシュアルな男性役割を遂行する人間を求めており、両者の権力性は、給料を得るだけのプロと比較すれば、より対等なものに近づく。三橋さんによれば、照明は高級店よりも暗めにされるものだったようだ。そうであるならば、互いの姿ははっきり視覚化されなくなり、やはり、男性のまなごしの重要性はより薄れるだろう。だが、男性の視線はまったく大切でなくなるわけではない。男性として店を訪

---

10) 1960年代に、プロの女装者が接客するゲイバーから独立した存在として、アマチュア女装者の従業員や客が接客するスタイルが新宿歌舞伎町で生まれた(三橋 2006: 9)。

11) 現状それだけの金額を取る店は高級店の部類であろう。2016年時点でいくつか著者が確認した女装クラブの場合には、全体的に1時間当たりの料金単価はより低く、また、必ずしも男性が時間加算で女装者(女性)が無制限であるわけでもなく、両者ともセット料金だったり、また、両者とも時間加算だったりした。ただし、女装者(女性)の料金が男性よりもやや安く設定されていることは一般的な傾向であった。

れていた人が女装客になりたいと店のママに話した時、次のような会話があったと三橋さんは語った。

三橋：男性客で来ていた人が、やっぱり「女装したい、女装会員になりたい」って言った時に、ママが「悪いこと言わないからやめなさい、あなた、女になってもきれいになれない、きれいじゃない女装の子がこういう場所でどういう待遇になるかっていうの、あなた分かるでしょう、今のまま男性で来ていたほうがずっと楽しいわよ」って説得するわけです。脇で聞いていて、ママの言うとおりでと思うんだけど、一方で女装したいって言う人の気持ちも分かるので、結構つらかったですね。「どうしても」って言うんだけど、ママも絶対駄目って言う。それはあんたのためにならないからって言う。絶対楽しくないよって言う。

ここで男性のまなざしが重要なのは、他者からの承認の問題である、それによって職を失うなどのプロの領域での経済的なものでは基本的にない、女性として見なされ、接せられたいというその人の要求は、往々にして当人の容姿に起因して、ほかの客によって、嘲笑や冗談として、受け止められなかったり否定されたりすることがある。それでは、この場に来て女装しても楽しくはないだろうという気づかいであったそうだが、もちろん、男性客として訪れてくれたほうが店としても利益があるということもあっただろうが、この話の前段で三橋さんはかなりの金額を使い、店の売りに貢献していた男性客が女装客になりたいと言ったのを、店のママがしぶしぶ了解した話をしている。したがって、金銭的なのみならず、容姿のセレクションが焦点化されることがうかがえる。

三橋：結局、(ある男性客が女装者として店に通いたいと言った)その時は、ママもうしぶしぶ認めて、あとでずいぶんぶつくさ言っていたけど、認めたわけですよ。それ認めたのは、彼女がそれなりの容姿になるのがママも分かっていたからですよ。たしかに後々、それなりに活躍してくれたんだけど。

では、セレクションに耐えられない人たちはどうなるのだろうか。一つは、利用料を支払い、そうしたニーズに応じてくれる、完全にアマチュアな女装者のための場に行くことである。先ほどの女装クラブとの差は、場がより厳格に、「他者のまなざし」を無化することにある。重要なのは当人の満足感であり、鏡や写真に写る自らの視線だけが問題となる。代表的なのは、1978年創業のアマチュア女装クラブ「エリザベス」である。ここでは、女性服のレンタル、メイクアップ、写真の撮影などのサービスが提供される。三橋さんによれば、女装をしない男性客は店の中に入ることができないという。また、エリザベスのHPには、プロの来店や、ほかの客に対する嫌がらせが禁じられていることが明記されている（エリザベス 2017）。エリザベスのHPで公表されている利用者のプロフィールのなかには、かれらの写真とともに「設定年齢」が設けられている。そうした、実年齢とは違う（往々にしてより若年の）年齢を自称すること自体は、これまで見てきた高級クラブや女装クラブ、セックスワークでも珍しいものではない。たとえば、三橋さんは、実際よりも12歳年下に言うことで干支を間違えなくて済むだとか、客も察してサバをよんだ分、半分（6歳）は戻すのだという駆け引きの話をしてくれた<sup>12)</sup>。こうした駆け引きの話に象徴されるように、「設定年齢」は客との相互関係で決まるものであり、一般的には若年の女を求める客のためのファンタジーである。しかし、完全なるアマチュア女装の場合、「設定年齢」は自分のためのファンタジーであり、思う年齢で好きな格好を楽しめばよい。第三者的に見た姿と自分がなりたいと思う姿の間にかい離があったとしても、その当人さえ満足すれば問題化しない。なぜなら、他者のまなざしは無化されていて、その場において、なりたい自分に同一化し、没頭していることを非難したり中傷したりする者は排除されているからである。エリザベスでは、特別の外出イベントを除き、女装姿で店に通ったり、店の外に出ることはできない。そのようなルールを設けた理由は、近隣との関係性なども含め多々あるだろうが、先の場の文脈で見るとすれば、店の外に出た時点で、他者のまなざしと年齢やジェンダー規範に応える義務は蘇り、ファンタジーの世界が危機に瀕する可能性があるからだといえる。そして、三橋さんの話によれば、こうした外出イベントにはセレクションがかかり、主催者の側が、連れていく人

12) (三橋 2008: 255) に年齢についての関連記述がある。

とそうでない人を選ぶのだという。

### 3.5 新しいビジネス

プロの世界のキャパシティが有限であることを考えれば、多くの人たちはアマチュアの領域に流れてくるのが想定される。そして、こうした人たちを対象に、よりコストのかからない新しいビジネスが流行していると三橋さんは教えてくれた。それが、貸しロッカービジネスである。それぞれホームページで宣伝がなされ、テレビで放映された店もあるようだ。サイトから検索すると、女装クラブが運営しているところもあれば、そうでない店もある。こうした店には、異性装のための荷物を預かってくれ、着替えや化粧品をしたり、衣装を洗濯するスペースもある。限られた衣装やウィッグを貸し出してくれるところもあるが、基本的にはそうしたものは自分で用意する。多くが新宿2丁目や歌舞伎町に隣接しており、こうした店に遊びに行くのに便利な立地にある。ただし、支度部屋自体はそう新しいものではなく、女装店のシステムにもあった。その場合、利用者は女装店の会員になる必要があって、もっぱら部屋を利用した際にはその店に顔を出す必要があった（三橋 2002: 98-9）。では何が今日的な特徴かといえ、女装店と支度部屋のサービスが切り離されたことにあり、そのため、女装店と客の結びつきはより弱いものになる。先に見たように経営者は女装店と関係がなかったり、あるいはこのロッカールームが提供する部屋から出てこない利用者さえいると考えられる。もちろん主な利用者層は、ある程度外出までできる人たちだろう。ただし、外出へ抵抗がある会員に向けて、1時間ごとに料金をとって付き添うサービスなどを行うところもあるために、まったくの異性装初心者をもまたターゲットにしている。パッケージ化されていたサービスは細分化され、小規模化し、経営者にとってリスクの少ないものになっている。その分、コミュニティと個人との関係は出入り自由な、その場限りの度合いが高いものになっていく。

昨今、「男の娘」などの名称で、秋葉原のオタク文化と結びついた若年の女装者たちが着目されている。女装ニューハーフ系イベント「プロパガンダ」(2007年～2016年3月終了)が盛り上がりを見せたり、若い層をターゲットとした女装クラブなどがオープンしている。その一方で、若い世代だけでなく、2000年

代より流行の兆しを見せているのが中高年から始める女装であると三橋さんはいう。

三橋：(女装クラブで一緒になった人に)「今まで、女装の経験ってありますか」って尋ねたら「ない」って言うのね。今まで、だから、ずーと女装していて、若いときから女装クラブに通って中年になったっていう人はいるわけ、いくらでも。だけど、中年になってからいきなり始めるっていう人が増えたのは、何か性同一性障害と関係があるのかなと。

性同一性障害概念の登場や男の娘などの流行が、中高年の男性に性別越境についての知識を与えることになったのかもしれない。こうした中高年は商業世界にとっての重要な顧客となり、ビジネスを牽引するだろう。かれらは往々にして社会生活において中年男性として働き、ほかの世代や女性と比べて多くの稼ぎを得ており、かれらの経済的貢献は大きいと思われる。

容姿のセレクションという文脈が絶対視されないことは、「性同一性障害」を入り口とする当事者にも当てはまることである。身体的な医療ケアを必要とする当事者に関しては、ゲートキーパーとしての医療者はいるものの、医療者が性別越境を止めるとすれば、それは美的問題というよりは、当人の意思の強さやジェンダー・アイデンティティの一貫性に問題があると思われたり、当人が置かれている環境や有する能力で実際にその性で生活していけるであろうという予測が立てられないなどと認識されたためである。プロの世界でかかった容姿のセレクションや、メイクや服装などの外見を磨くスキルの向上、振る舞いの教育は、必ずしも通らなければならない道ではない。さらに、医療にかからない曖昧なジェンダー・アイデンティティの人たちも含め、かれらは、これまでの商業世界で重要視されてきた「男性の視線」から相対的に離れることが可能になる。(往々にして中年)男性のまなごしの重要性が下がることは、同時に、承認欲求を満たす「他者」を不特定化させるだろう。女性、若年者、友人、家族、外国人、SNSの投稿に反応する者たちなどを介して、自分らしい性を生きることへの承認を得ることに比重が置かれるようになると考えられる。

### 3.6 セックスワーカーについて

トランス女性のセックスワーカーについては、経営コストのかかる店舗型の店は多くなく、非店舗型のいわゆるデリバリーヘルス（以下デリヘル）が主流だという。畑野さんがいわゆる「ニューハーフ」のデリヘルで働いていた1990年代半ばから2000年代後半までの間、顧客の多くは40代以降の男性であり、リピーター客が多かったという。40代の男性が多い理由については、金銭面の問題が大きいだらうと話していた。当時、シスジェンダーの女性と比べて、トランス女性のセックスワークの料金は高く設定されていたという。畑野さんによれば、シスジェンダーのセックスワーカーの料金が90分2万円ほどに設定されていたのに対し、トランス女性の価格は、2万5000円が主流であったという。その理由としては、希少性、そして客の回転率が低いためそうせざるを得なかったという事情があったようだ。現在は、競合店も増え、料金は全体的に値下がりしているという。また、店舗型から非店舗型のデリヘルへと形態が変わったことの一つの利点として、警察の営業許可が下りやすいために、合法的な営業を行えるようになった傾向があると畑野さんは語った。

ただし、非店舗型では、相手が指定する場にひとりで向かわねばならず、密室であるがゆえにワーカーが負うリスクも高い。畑野さん自身、パートナーと二人でデリヘルの店を経営していたが、パートナーが派遣先の客の自宅から帰宅後に、様子がおかしくなったことがあったという。二人は、客から出された飲み物のなかに薬物が混入されていた可能性があると考えたそうだ。

畑野：怖いのが薬を盛られるパターンがある。お客さんが、「じゃ、とりあえず1杯やろうよ」みたいな感じで、そん中に覚せい剤系のお薬とかが入っていたりとか。覚せい剤タイプって、経口でも結構。

I: そうです、効いちゃいますよね。何で分かったんですか、そんな危険な。

畑野：いや、うちの相方が、お客から帰ってきたあとのテンションがありえないほど高くて、「何か盛られたね」という。本人もその状況で、自分でふと気が付いて、おかしいっていうのに気が付いて。

さらにリスクが増しているのが、いわゆる出会い系サイトを通じての個人取

引である。インターネットの普及とともに、オンライン掲示板で直接やりとりをおこなうことができるようになっており、「女装娘」、「ニューハーフ」といったトランス女性や女装者に関する用語と「サポート」などの援助交際の隠語を検索サイトに入力することで、複数の専用サイトが確認された。買春客の男性が書き込んでいることもあれば、売春をする側が書き込んでいることもある。個人間取引の場合、ワーカーを守る人たちも存在しなければ、確固とした支払いルールがあるわけでもない。そのため、個人間の駆け引きが必要となる。それは、往々にして売春する側が不利な立場に置かれることを意味する。畑野さんは次のように話した。

畑野：インターネットで個人でやりとりしていると、個人でやりとりしている子っていうのは、交渉能力が低いとどんどんお客のほうから値段下げられていったりするので。今、ニューハーフのほうはどうだか知らないけど、例えば、ゲイの売り専とかで、ひどい子になると、もう食事1回分だけでエッチするとか。(中略)ほんとにほとんどホームレス状態で、何とかそれで食いつないでいる子みたいなものもいっぱいいて。もう、そういう世界ではほんとに、セーフセックスなんて言葉はもうないに等しい。

密室で二人きりになり、第三者に知られることなくセックスワークが行われるとき、そのリスクは多岐に渡る。例えば、複数人で待ち伏せされている、料金が切り下げられる、支払いがなされない、無断で撮影などの記録がされる、暴言を吐かれる、身体を傷つけられる、性感染症予防を行わない、リスクの高いセクシュアルな行為を強要される、死に至る暴力に晒されるなどである。まして、このセックスワークに頼る生活を送る人々は、社会的弱者の立場に置かれている。こうした実態がゲイの「売り専」、すなわち、セックスワーカーには見られるという。トランスジェンダーにも同じことが言える可能性が高いが、深刻なことに、実態が知られていない。これは今後調査される必要があるだろう。

併せて畑野さんは、こうしたトランスジェンダーの人々に「貧困が目立つ」ことを指摘している。貧困状態に置かれている人たちにとって、時間や条件に

余裕をもって相手と向き合うこと自体が難しい。また、セックスワーカーたちにとって重要なのが、リピーターを獲得することであるが、そのためには感情労働を含めた、買春相手をつなぎとめておくコミュニケーション能力が必要とされる(田中2014)。それができなければ、常に新規の人間を相手にしなければならない。往々にして、かれらは素人であり、そうした相手の心情を掴む技能をプロの人たちに比べて持ち合わせていないと想定される。そうであるならば、常に新しい不特定多数の人間に自らの性を売ることになり、それは性感染症から命の危機まで、様々なリスクを高めることになるだろう。

また、トランスジェンダー男性についてはより深刻な状況があると畑野さんは話す。

畑野：トランス男性で(体を)売っている人がいっぱいいるんです。

トランス男性のセックスワークについてはトランス女性以上に情報がなく、このことは、こうしたトランス男性の置かれている状況をより悲惨なものにしているだろう。トランス男性がセックスワークを行う場合、ほとんどがインターネット経由の個人間取引をしており、また、ホルモン療法を受けていることから妊娠しないと考え、避妊を行わないことがあると畑野さんはいう。性別適合手術を受けて、子宮や卵巣、卵管の摘出を行うのでなければ、妊娠の可能性はあり続けるが、その情報はこうした行為の従事者に共有されていないということだろう。そして、避妊を行わないことはすなわち性感染症予防の措置をとっていないことを意味し、こうした行為によって、感染リスクは高まる。諸外国の調査では、トランス男性は、トランス女性と比較して著しくHIV/AIDSの知識がなく、それゆえ、調査対象者の56.7%はHIV/AIDSの検査を受けたことがなかったというデータも示されている(Kenagy 2002)。さらに、トランス男性たちは、トランス女性と比較して、性感染症予防を行った割合が著しく低く、また、顕著にハイリスクな性行為に携わっていた(Kenagy and Hsieh 2005: 201, 202)。日本国内においても、トランス女性に比べてトランス男性の存在は、不可視化された存在であり、かれらがどのようなリスクを抱えているのかは見えてこない。特に妊娠の事実はかれらの自尊心を著しく傷つけるものであると考えられ、

この経験が積極的にコミュニティなどで語られ、共有されるとは考えにくい。

### 3.7 求められる身体像

トランスジェンダー女性について、いわゆるニューハーフの人たちの間で一般的に商業的価値が高いのは、陰茎を残し、それ以外の身体的特徴を女性化するものだろう<sup>13)</sup>。彼女たちにとって優先度が最も高いのが顔の手術であり、豊胸が続く(三橋 2012: 476)。特に、豊胸は、商業世界に生きるトランス女性にとって重要なものであると三橋さんは指摘している。

三橋: 胸(の膨らみ)は、特にセックスワーカーやプロの水商売の場合は、かなり必須に近いです。胸があるのとないのとじゃ、全然売上が違ってくるんです。

陰茎以外の身体イメージは、シスジェンダーの女性の理想像と変わらない。しかし、三橋さんや畑野さんによれば、陰茎は除去しない方が商業的な価値が上がるのだという。すなわち、ペニスが残ることによって、男性性と女性性の両方を兼ね備えた身体を有することになる。この身体こそ、その人物が性別越境者であることを視覚的に物語るものであり、シスジェンダーの女性と彼女らを差異化する最もわかりやすいシンボルなのである。ところで、筆者は、あるトランスジェンダー女性に、「性同一性障害概念」が登場する前、商業世界にいたトランス女性は、店に借金をして身体を女性化するための手術を受け、その金のために店を離れられなかったという噂を聞いていた<sup>14)</sup>。この話の信ぴょう性は、三橋さんによって、先の理由のために否定された。つまり、店にとって、陰茎を除去したトランスジェンダー女性は商業的価値を失うために、むしろ店は従業員たちにそれをさせないようにしたという。

三橋: 身体的に言えば、SRS(性別適合手術)しちゃった途端に、これは

---

13) ニューハーフ、女装者、性同一性障害の人たちの身体加工については(三橋 2012)を参照のこと。

14) 噂話については(三橋 2010: 177-8)も参照のこと。

水商売でも、特にセックスワークの場合はなおさら、ニューハーフとしての価値はもう激減です。(中略)だから、私がよく言うことだけど、ニューハーフさんは上から下へ手術する。顔やって胸やって、でも下はママが止めるんです。スタッフとしての価値を損なっちゃうわけですから。だから、仙台の「おまんじゅ姫」の大ママが言っていたけど、「本人たちはやっぱり手術したがる。それを、どうやってなだめすかして止めるか、それがママの腕の見せどころ」って<sup>15)</sup>。

加えて、「男の娘」ブームとともに、また新たな身体像の需要が高まったという。それが、女性的な外見、衣服を身にまとっているが、身体としては男性的な特徴をすべてそのまま残しているというものである。一般的なゲイ男性と異なるのは、髪型、メイク、話し方やしぐさはすべて女性的なものであり、身体だけが男性的である点だ。

畑野：最近の傾向は、ちょっとそれから外れてきていて、洋服を着ているときはすごいかわいい女の子で、でも、下は、全部男の子で元気なほうがいいみたいな。

I：それ、変わってきたっていうのは、その前は何だったんですか。

畑野：それ以外は、あそこ以外は、女性になっていたほうがいっていう流れだったのが、いわゆるほんとに男の娘ブーム。(中略)男性側からみるギャップ萌えっていうやつで、もう限りなく、だから感覚的にはゲイに近いよね。

この身体像の需要は、先のセックスワークの素人化に拍車をかける可能性がある。インターネットで需要と供給が一致すれば、ホルモン療法や性別適合手術を受けていなくても、ゲイ男性を相手にする時とは違い、男性性を求められ

15)また、ホルモン療法や豊胸手術に関しては店に多額の借金をする必要があるほど費用がかかることはない。ただし、当時手術を受けるほどの人物が在籍するに相応しいような高級店が何度も移籍できるほどあったかどうかや、社会状況などを含めて考えると、店と従業員の関係性については今後調査が必要であろう。

るのではなく、女性役割を担うことができる。これにより、他者から男性としてみなされることに抵抗のあるトランス女性にとって、セックスワークに関わる際の心理的な負荷はより減るであろう。

また、性別移行を完全にしていないトランス男性の身体についても、男性の需要があると畑野さんは話した。

畑野：トランス男性で、だから、ホルモンとかで体は男性化しているけれども、ヴァギナとかついたままじゃないですか。だから、割と、ちょっと中途半端なゲイの人に受けがいいんです。

先の妊娠の問題と関連して、かれらが貧困状態に置かれていたり、適切な知識を有していない、あるいはコミュニケーション能力が十分でないなかでの個人間取引は非常に危険であることを再度強調しておきたい。かれらの心身が傷けられるリスクは非常に高く、そうした状況すら、当人同士以外に、現状正確に把握できている者や機関はない。

#### 4 おわりに

ここまで、国内の性別越境と商業世界の関係性について概観してきた。高級クラブやショーパブといった業種は、設備投資、維持費がかかり、働き手の長期間の訓練を必要とするものである。高級クラブにおいては、働き手の容姿や振る舞い、コミュニケーション・スキルは卓越化していなければならない。なぜなら、客に相応の対価を求めるからである。一年目は黒服をやり、表舞台にさえあげてもらえない。ショービジネスにしても、ダンスの高い身体技術、美しい容姿の追求維持、また、クラブ同様に会話技術などが必要とされる。ただし、トランス女性にとって、こうした世界はより女性らしい女性となるために関わるべき世界でもあった。社会のなかにトランス女性を受け入れる受け皿がなかったからである。ここである程度の成功を収めたほんの一握りの人たちが、主に海外でホルモン療法や性別適合手術を受け、「ニューハーフ」として、女性のもつとされる容姿と振る舞いが許され生きていくことができた。プロ化

と女性化の要素は相関していたともいえる。そこにはヒエラルキーもあっただろう。目指す女性像は同じだったからである。商業世界で食べていくことができる人たちは、それだけ身体が女性化し、女性のハビトゥスを内面化し、女性として過ごす時間が長い。その世界とのかかわりが薄くなるほど、あるいは自らが顧客になるほど、その程度は下がる。70年代にはアマチュア女装者のための店があったが、それは、フルタイムで女性として過ごすための知識を与えてくれる場というよりは、すでに見たように、他者からの視線を遮断している点で内向きであり、その場限りの女性としての時間を謳歌したのだととらえるべきであろう。

そういった意味でも1990年代の性同一性障害の登場は状況を大きく変えた。商業世界ではなく医療と結びついて、より多くの人たちが望みの性で生きることができるようになった。高級クラブやショーパブは、一見して「性同一性障害」が登場する以前の世界観をそのまま保持しているようだ。相変わらず「ニューハーフ」などの用語を使い続け、「元オトコ」であることの希少性、現在のあり方とのギャップを効果的に見せ、女性になり切れない様子で笑いを取り、両性の特徴を有する身体を売りにしている。こうした店が、現状どうなっているのかは今後の調査を行わなければ明確には見えてこない。現時点で予測されるのは、景気などの経済的要因を除けば、こうした店が扱うトランス女性像の変化は、あったとしても比較的緩やかなのではないかということである。特徴が出てくるのは、より素人の人たちが関わる領域なのだろう。性別越境については未だ強くスティグマ化されていると考えられるが、それでも、「性同一性障害」概念の登場による医療や法と結びついた社会的認知と受容、インターネットの普及による情報共有の容易さ、サブカルチャー文化と結びついた「男の娘」ブーム（三橋 2009, 2013）、近年のLGBTの人々の権利意識の高まりなどにより、トランスジェンダーあるいはクロスドレッサーとしてかかわる障壁はそうしたものが普及する前と比べれば下がったはずである。そうした人たちを、商業世界は新しい手法で巻き込もうとしている。新たな商品化のターゲットは、プロの商業世界からも、そして、医療にとっても、これまでメインの対象にならなかった人たちである。この二つの領域に関わってまず生きやすさを獲得できるのは主には性別二元論規範に合致する人々であった——医療であれば、明確で

一貫したジェンダー・アイデンティティを有し、性別移行をした後も社会の中で生きられる人々、商業世界であれば、それに加えて、魅力ある容姿、話術、振舞いなどである。医療は、再帰的で多様なジェンダー・アイデンティティや身体観を有する人たちに合わせて、手術やカウンセリングなど、そのサービスの内容や対象を拡大させてきている。商業世界においては、パートタイムで性別移行をする人、また、多様な身体を有する人たちをより抱合するような方向へと拡大しているが、それは大規模なクラブやショーパブに比べれば、より少数の人たちをターゲットとしている点で、零細化している。また商業と性別越境の関係は、手軽化、素人化、個人化、不透明化していることが指摘できるだろう。今後、トランスジェンダーやクロスドレッサーの人々がサービスの提供者となるクラブやショーパブのビジネスの規模は、景気にも依存するだろうが、高級店になるほど受け皿が大きく増えることは考えにくい。その一方で、性別越境についての情報にアクセスしやすくなったことで、性別越境に関わる人たちが増えたとき、その人たちがどのように商業世界と結びつくのが着目される点であろう。かれらは顧客になり、よりポップなイメージ、手軽な値段で利用できるようになった女装クラブへ行ったり、あるいは、経営者側にとってリスクの少ないロッカービジネスなどの少額ビジネスを利用するだろう。または多様な身体像を欲望の対象とする人間とそれを売ることのできる環境が、インターネットという媒介の登場と治療の多様化によって可能となっている。そのために、個人的な性の売買へと向かっていく人たちもいる。こうした人たちの存在は、「性同一性障害」概念を基にした社会的な承認が多くの問題を取り残していることを示唆している。貧困と結びついたセックスワークによって、社会的弱者の立ち場におかれた人々の身体はリスクにさらされるが、その実態はほとんど見えない。

本論では予備調査から得られた情報に基づき、トランスジェンダーやクロスドレッサーの人々と商業の関係性について論述したが、詳しい状況については不明瞭なままであり、また、現在商業世界に関わっている人たちの声を反映することができていない。今後の調査では、倫理的な側面に配慮を行いつつ、こうした商業世界に関わる人たちの聞き取りなどを行って、「性同一性障害」後の状況を明らかにしていきたい。

## 謝辞

インタビューを受けてくださった三橋順子さん、畑野とまとさん、岡田トリシャさんの協力に感謝いたします。本研究は、「独自化する自己像——性別に違和感を覚える人々の生活世界から」（日本学術振興会特別研究員奨励費14J11903）より助成を受け実施された。また、法政大学佐藤伴近氏より英文タイトルについて助言を受けた。

## 文献

- Bianchi, Fernanda T., Carol A. Reisen, Maria Cecilia Zea, Salvador Vidal-Ortiz, Felisa A. Gonzales, Fabián Betancourt, Marcela Aguilar and Paul J. Poppen. 2014. "Sex Work among Men Who Have Sex with Men and Transgender Women in Bogotá." *Archives of Sexual Behavior* 43(8):1637-50. doi: 10.1007/s10508-014-0260-z.
- エリザベス, 2017, (2017年2月27日取得, <http://www.elizabeth.co.jp>).
- 法務省, 2014, (2017年1月7日取得, <http://www.moj.go.jp/content/000121299.pdf>).
- , 2016, (2017年1月7日取得, <http://www.moj.go.jp/content/001204549.pdf>).
- 石井由香理, 2013「トランスジェンダーの性に関する意識はどう変遷したか——当事者演劇団体の台本分析を通じて——」『ソシオロジ』58(1): 89-105.
- Kenagy, Gretchen. P. 2002. "Hiv among Transgendered People." *AIDS Care* 14(1):127-34. doi: 10.1080/09540120220098008.
- Kenagy, Gretchen. P. and C. M. Hsieh. 2005. "The Risk Less Known: Female-to-Male Transgender Persons' Vulnerability to Hiv Infection." *AIDS Care* 17(2):195-207. doi: 10.1080/19540120512331325680.
- McLelland, Mark, 2005, *Queer Japan from the Pacific war to the internet age*. Maryland: Rowman & Littlefield Publishers.
- 三橋順子, 2005, 「トランスジェンダーと興行——戦後日本を中心に」『現代風俗研究会年報』26: 48-76.
- , 2006a, 「戦後東京における『男色文化』の歴史地理的変遷——『盛り場』の片隅で」『現代風俗学研究』12: 1-15.
- , 2006b, 「現代日本のトランスジェンダー世界——東京新宿の女装コミュニティを中心に」矢島正美編『戦後日本女装・同性愛研究 中央大学社会科学研究所研究叢書16』中央大学出版部, 355-396.
- , 2008, 『女装と日本人』講談社.
- , 2009, 「変容する女装文化——異性装と自己表現」成実弘至編『コスプレする社会——サブカルチャーの身体文化』せりか書房, 84-114.
- , 2010, 「トランスジェンダーをめぐる疎外・差異化・差別」『現代の差別と排除6セクシュアリティの多様性と排除 明石書店, 162-191.

- , 2012, 「異性装と身体意識 - 女装と女体化の間 -」武田佐知子編『着衣する身体と女性の周縁化』思文閣出版, 469-489.
- , 2013, 「平成二四年度(平成二四年六月一五日)日本文化研究所主催講演会「男の娘(おとこのこ)」なるもの——その今と昔・性別認識を考える(特集 女性なるものと男性なるもの)」『日本文化研究』10: 62-83.
- 岡田トリシャ, 2014, 「日本におけるトランスジェンダーのフィリピン人エンターテイナー」『ジェンダー研究21』3: 51-63.
- Pandey, Rajyashree. 2009. "Reconfiguring sex, body and desire in Japanese modernity." *Postcolonial Studies* 12 (3): 289-301.
- Pflugfelder, Gregory M. 1999. *Cartographies of desire: Male-male sexuality in Japanese discourse, 1600-1950*. California: University of California Press.
- Poteat, Tonia, Andrea L. Wirtz, Anita Radix, Annick Borquez, Alfonso Silva-Santisteban, Madeline B. Deutsch, Sharful Islam Khan, Sam Winter and Don Operario. "Hiv Risk and Preventive Interventions in Transgender Women Sex Workers." *The Lancet* 385(9964):274-86. doi: 10.1016/S0140-6736(14)60833-3.
- Shapiro, Michael, 1994, *Gender in play on the Shakespearean stage: boy heroines and female pages*, Michigan: University of Michigan Press.
- 杉浦郁子 2006, 「1970, 80年代の一般雑誌における『レズビアン』表象——レズビアンフェミニスト言説の登場まで」矢島正美編『戦後日本女装・同性愛研究 中央大学社会科学研究所研究叢書16』: 491-518.
- Stryker, Susan, 2008, *Transgender History*, California: Seal Press.
- 田中雅一, 2014, 「『やっとうホントの顔を見せてくれたね!』——日本人セックスワーカーに見る肉体・感情・官能をめぐる労働について」*Contact zone* 6: 30-59